

## 華岡青洲 医案②

紀州市場村、木下七左衛門なる者。年二十七歳。崩瀉を患う。之を診するに、腹満・攣急・乾嘔して下利水瀉す。脈、右は微細、左は絶脈。人事を省みず。

一医、之を診して呉茱萸湯を投ずれども効なし。故に平山に来て治を乞う。門人診して四逆加人参を投ずれども、又効なし。暫時して虻虫一條を下す。依つて半瀉加椒梅・海人草を用ゆれども、虻下らず。嘔吐甚しくして渴す。故に治を師に請う。

師診して曰く、「此の証、脈絶すると雖も未だ額上の汗なく、且つ手足に冷汗なし。該するべからざるなり。二陳加藿を与えて嘔少しく収まる。又虻一條を下す。後、師に問うて傷寒の理中安虻を与えて、漸々嘔下共に止みて、後夜に至りて附子理中を用いて漸く治に安んじ、後小建中湯を与えて愈ゆるなり」。